



紫陽花や 昨日の誠 今日の嘘 ~正岡子規~

暦は6月に入り、21日は夏至です。夏至は立夏と立秋のちょうど真ん中にあたります。梅雨の最中の地域が多いのですが、「夏に至る」と書くように、この頃から夏の盛りに向かっていきます。今年の夏も服装や持ち物はもちろんのこと、体調管理は万全を期す熱中症対策が必要となるようです。

さて、今回の社内報では、目を動かすたびに目の前の浮遊物が動き、不快に感じる「飛蚊症」についてまとめてみました。

急に浮遊物が増えたり、視野に変化があったりしたら注意!



目の前に糸くずや虫が浮くように見える「飛蚊症(ひぶんしょう)」。多くは加齢などが原因で治療の必要はありませんが、失明に至る病気が隠れていることもあります。



【飛蚊症の正体】

飛蚊症の正体は、眼球の内部にある硝子体の濁りや、網膜からはがれた部分の影だそうです。硝子体は、無色透明なゼリー状のものが満たされた組織です。目に入った光は硝子体を通過して網膜に届き、像を映し出します。しかし硝子体の中に濁りがあると、その影が網膜に映り込み、糸くずや虫のように見えてしまうのです。

飛蚊症は大きく分け、生理的なものと病気が原因で起こるものがあります。生理的なものの主な原因は加齢で、50歳ごろから増え始めます。年を取ると硝子体はゼリー状から液状に変化し、その際に硝子体が収縮し濁りが生じます。また、この収縮で硝子体が網膜からはがれる「後部硝子体剥離」を起こすことがあり、その場合は突然、

飛蚊症が起こるケースが多いそうです。強度の近視の人は若くても起こります。

【飛蚊症に隠れた病気】

飛蚊症の多くは生理的なもので治療の必要はありませんが、速やかに治療すべき病気が隠れていることもあります。その一つが網膜剥離です。後部硝子体剥離が起こるとき、うまく硝子体が網膜からはがれないと、網膜に穴があく「網膜裂孔」を起こすことがあります。これを放置すると網膜剥離の原因となります。



防ぐには後部硝子体剥離や網膜裂孔の早期発見が重要です。後部硝子体剥離が起こると、視野の端に閃光が走り飛蚊症が出るケースが多いそうです。その場合は速やかに受診しましょう。例え網膜剥離であったとしても、早期であればレーザー治療で対応できるそうです。その他に網膜静脈閉塞症や、糖尿病網膜症などの出血を伴う病気もあります。網膜の血管が破れ、血液が硝子体に入り飛蚊症になります。高血圧や糖尿病、脂質異常症などの生活習慣病の人は、これらの病気になりやすいので、飛蚊症があれば定期的に眼科を受診し、眼底検査をするのがいいそうです。

さらにぶどう膜炎や視神経炎などの炎症疾患も飛蚊症の原因になります。ぶどう膜炎の場合、炎症で増えた白血球や炎症成分が硝子体に入って濁りになります。ぶどう膜炎の原因には、パーチェット病などの自己免疫疾患や、細菌やウイルスの感染などがあります。また、アトピー性皮膚炎で目をこする、ラグビーなどのコンタクトスポーツで目を強打するなど物理的な刺激や外傷も、飛蚊症を引き起こします。

【飛蚊症の見分け方と対応策】

では、自分の飛蚊症が病的なものか生理的なものかをどう見分ければよいのでしょうか。急に浮遊物の数が増える、視野がかける、目の前に墨を垂らしたように見えるといったことがあれば、すぐに受診をしましょう。

また、飛蚊症があるなら、定期的に自分の見え方を確認することも大切です。月に一回片目ずつ、白い壁などを見て、浮遊物の量と視野の変化をチェックしましょう。

残念ながら生理的な飛蚊症の場合、保険の適用はありません。目に入る光が強いと飛蚊も気になるので、モニターの画面の輝度を下げたり、薄い色のサングラスをかけたりして光量を調節すると気になりにくくなるそうです。(日経新聞コラム参照)

編集後記

6月の花嫁を意味する「ジュンブライド」。ヨーロッパでは古くから「6月に結婚した花嫁は幸せになれる」という言い伝えがあり、6月に結婚するカップルがたくさんいます。由来は諸説ありますが、最も有名なのは、ローマ神話の主神ユーピテル(Jupiter)の妻で、女性の結婚生活を守護するユノ(Juno)が6月を守っているからというもの。なお、英語で6月を「June」というのも女神ユノに由来するそうです。



日本では梅雨の時期にあたりますが、1960年代後半あたりからホテル業界やブライダル業界がPR するようになり、シューンブライドに憧れる花嫁が増えて広がったそうです。